

2021年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ (JA米)

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

てんたかく

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
m ² 当たり穂数(本)	500	m ² 当たり粉数(粒)	30,000	玄米千粒重(g)	23.5
一穂粉数(粒)	60	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月

育苗期
5/5 田植え
活着期
有効分げつ期
無効分げつ期
6/27 幼穂形成期
穂ばらみ期
7/18
登熟期
8/23
成熟期

作業日程の目安

品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用率(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■秋耕の実施
稲わらは秋のうちに5~10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

- 土づくり**
 - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
 - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 適正な乾燥調製**
 - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
 - 水分14.5~15.0%に仕上げる。
- 適期収穫**
 - 刈取り時はあらかじめ入水する。
 - フェーン時はあらかじめ入水する。
 - 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。
- 収穫までの水管理**
 - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
- 除草の徹底**
 - 7月上旬までに畦畔や雑草の草刈りを終える。
 - 草刈りが浅い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
 - 葉色が濃い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
 - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
 - 1回目穂肥は幼穂長1~2mmと葉色を確認してから施用する。
- 幼穂形成期から飽水管理**
 - 6/20頃に「エスアイ加量」または「一種加量」を施用する。
 - 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水。
 - 中干しは強すぎないように注意する。
 - 田植後4週間までに開始する。
- 中干しは適期に開始**
 - 5mに1本を目安に溝を掘る。
 - 溝掘りは確実に。
 - 活着後は、浅水管理をする。
 - 活着後は、浅水管理をする。
 - 植付深さは3cm。
 - 植付本数は株当たり3~4本。
 - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
 - 苗箱施薬による防除を実施する。
 - 基肥は基準量を守る。
- 田植え**
 - 搬出直後から換気の徹底。
 - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
 - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
 - ゆっくりと耕起し、作土を15cm以上確保する。
- 耕起・代かき**
 - 確実に施用する。
 - 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

適期中干し開始・適度な中干し実施

- 田植後1か月(8葉期頃)は、最も根が伸びる時です。この時期に中干しをすることで、根の伸長を促進します。
- 中干しの効果を高めるため、中干し前には溝掘りを確実に実施しましょう。

適期中干し

・葉が直立
・葉が太い
・根量が多い

中干し未実施

・下葉が枯れる
・根が細い
・根量が少ない

中干しの有無による根の姿 兼用管理機での溝掘り

除草剤散布は遅れずに 雑草防除体系

● 5cm程度の水深を確認する。
● 除草剤散布後7日間は落水やけらしをしない。

雑草の発生が少ない圃場：一発処理

- カチボン**
 - ・1キロ粒剤51・Lジャンボ
 - 使用時期：移植時~ノビエ2.5葉期
- アピログロウMX**
 - ・1キロ粒剤・ジャンボ
 - 使用時期：移植後3~12日~ノビエ2.5葉期
- エンペラー**
 - ・1キロ粒剤・豆つぶ250
 - 使用時期：1キロ剤：移植時~ノビエ3.0葉期
豆つぶ剤：移植直後~ノビエ3.0葉期

雑草が残った場合

ノビエが残った場合

クリンチャー 1キロ粒剤

使用時期：1kg/10a 施用
移植後7日~ノビエ4.0葉期
1.5kg/10a 施用
移植後25日~ノビエ5.0葉期

トドMF 1キロ粒剤

使用時期：移植後14日~ノビエ5.0葉期

広葉雑草が残った場合

バサグラン粒剤

使用時期：移植後15~5日

ノビエ・広葉雑草どちらにも効果有

トドMF乳剤

使用時期：移植後15日~ノビエ6.0葉期

※赤字の薬剤は令和3年度新規採用薬剤

雑草の発生が多い圃場：体系処理

体系①：ノビエ対策

- マーシエット** 1キロ粒剤
- 使用時期：移植後3~5日~ノビエ1.0葉期

体系②：ホタルイ対策

- ピラクロン** 1キロ粒剤
- 使用時期：移植時同時使用

体系③：初期剤+中期剤

- ピラクロン** 1キロ粒剤
- 使用時期：移植時同時使用

いずれか1剤

- カチボン** 1キロ粒剤51・Lジャンボ
- 使用時期：マーシエット散布後7~12日に使用~ノビエ2.5葉期

- エンペラー** 1キロ粒剤・豆つぶ250
- 使用時期：ピラクロン散布後14日以内

- ファイナルSM** 1キロ粒剤
- 使用時期：移植後20~30日~ノビエ3.5葉期

- サンパンチ** 1キロ粒剤
- 使用時期：移植後15~30日~ノビエ3.0葉期

防除の徹底で被害を防止!!

● 基本防除を適期に行い、防除間隔は7日間を目安とする(10日以上あけない)。

● 畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。

● 麦と等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

病害虫防除体系

【育苗基本防除】・苗箱施薬剤は、規定の量(50g/箱)を厳守し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	白葉枯病、もみ枯病、イネネズミ、イネドクモイシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネメイガ、コナメイト、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ
パイグレットバディート粒剤	50g/箱	緑化期~移植当日	いもち病、白葉枯病、もみ枯病、イネネズミ、イネドクモイシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ
エパーゴルフワイド箱粒剤	50g/箱	播種時(覆土前)~移植当日	穂枯れ(こま葉枯病)、白葉枯病、内臓病、イネドクモイシ、イネネズミ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、コナメイト、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ、イネヒメミドリ

※各薬剤とも、使用時期別に、上記以外の対象病害虫の登録があります。

てんたかく 【本田基本防除】 <粉剤、液剤体系>

防除時期	出穂前	穂ばらみ期	穂ばらみ後
粉剤	バリダシヨーカー粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラブサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	スタークル粉剤 DL 3kg/10a (収穫7日前まで)
液剤	バリダシ液剤5 1,000倍 (収穫14日前まで) MR.ジョーカー-EW 2,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	ラブサイドフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで) キラップフロアブル 1,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	スタークル液剤10 1,000倍 (収穫7日前まで) 使用液量：150ℓ/10a
対象病害虫	ウンカ類、ツマグロヨコバイ、カメムシ類、紋枯病等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ

てんこもり 【本田基本防除】 <粉剤、液剤体系>

防除時期	紋枯病の発生が多い圃場	基本防除
出穂7日前	バリダシヨーカー粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)	ラブサイドキラップ粉剤 DL 4kg/10a (収穫14日前まで)
出穂後(随時)	バリダシ液剤5 1,000倍 (収穫14日前まで) MR.ジョーカー-EW 2,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a	ラブサイドフロアブル 1,000倍 (収穫7日前まで) キラップフロアブル 1,000倍 (収穫14日前まで) 使用液量：150ℓ/10a
対象病害虫	紋枯病	いもち病、カメムシ類、ウンカ類

土壌に応じた適正な施肥量

てんたかく 施肥基準 (5/5植え)

※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系	分施肥体系	追肥
砂壤土	肥料名 施用率(kg/10a) 40	基肥206 40	10 13
半湿田黒ボク土	LPs 早生専用 35	基肥206 35	追肥3号 10 12
粘質土	30	基肥206 30	10 10

てんこもり 施肥基準 (5/10植え)

※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系	分施肥体系	追肥
砂壤土	肥料名 施用率(kg/10a) 45	基肥206 45	13 13
半湿田黒ボク土	LPs 晩生専用 40	基肥206 40	追肥3号 10 12
粘質土	35	基肥206 35	10 10

適正な生育量を確保するために、基肥は基準とする量を施用する。

てんこもり

収量構成の目安 (600kg/10a)

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
m ² 当たり穂数(本)	450	m ² 当たり粉数(粒)	31,000	玄米千粒重(g)	22.5
一穂粉数(粒)	70	登熟歩合(%)	85		

4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月

育苗期
5/10 田植え
活着期
有効分げつ期
無効分げつ期
7/17 幼穂形成期
穂ばらみ期
8/9
登熟期
9/21
成熟期

作業日程の目安

品質向上は「土づくり」から

資材名	標準施用率(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

■秋耕の実施
稲わらは秋のうちに5~10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

- 土づくり**
 - 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
 - 土づくり資材や堆肥を施用する。
- 適正な乾燥調製**
 - 1.9mmのふるい目を使用し、選別を徹底する。
 - 水分14.5~15.0%に仕上げる。
- 適期収穫**
 - 刈取り時はあらかじめ入水する。
 - フェーン時はあらかじめ入水する。
 - 刈取り予定日の5~7日前まで間断かん水を行う。
- 収穫までの水管理**
 - 生育ステージに合わせて防除を実施する。
- 除草の徹底**
 - 7月上旬までに畦畔や雑草の草刈りを終える。
 - 草刈りが浅い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
 - 葉色が濃い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
 - 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
 - 1回目穂肥は幼穂長1~2mmと葉色を確認してから施用する。
- 幼穂形成期から飽水管理**
 - 6/20頃に「エスアイ加量」または「一種加量」を施用する。
 - 中干し後は幼穂形成期まで間断かん水。
 - 中干しは強すぎないように注意する。
 - 田植後4週間までに開始する。
- 中干しは適期に開始**
 - 5mに1本を目安に溝を掘る。
 - 溝掘りは確実に。
 - 活着後は、浅水管理をする。
 - 活着後は、浅水管理をする。
 - 植付深さは3cm。
 - 植付本数は株当たり3~4本。
 - 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
 - 苗箱施薬による防除を実施する。
 - 基肥は基準量を守る。
- 田植え**
 - 搬出直後から換気の徹底。
 - 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。
- 健苗育成**
 - 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
 - ゆっくりと耕起し、作土を15cm以上確保する。
- 耕起・代かき**
 - 確実に施用する。
 - 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を